



夜は暗いのが当たり前と考える通山さんにとって、調光できるダウンライトの下でいい音楽とおいしいお酒に酔う時間は格別



小学生だった息子が中学生になり、愛犬キャリーが杉板に残した爪痕が思い出となり、2代目の愛犬サニーとの暮らしが空気のように感じられる日々。照島の家は、8年の歳月を経て、夕日に美しく照り映えています



大きく育ったガジュマルの木。根元が愛犬キャリーが眠っています



床板に刻まれた愛犬キャリーの爪痕



旅先で仮住まいさせてもらった海辺の家を照島で再現してから8年が経ちました

建築工房 自然木／照島の家・通山邸

台風情報には敏感になるけれど、それは年に数える程のこと

「おばあちゃんが育てた杉の木で家を建てようと思っていたときに出会ったのが、自然木の村田さんでした」
家族の健康を一番に考え、海辺の海気浴ができる環境の中で暮らし始めて8年。「息子もわたしもぜんそくが出なくなつたばかりか、病気ひとつしなくなつて」

息子さんも「海に近いところ、木がメインなところ、ウッドデッキが広くて遊べるところが気に入ってます」。ここは、人がよく集まる場所になっています。

通山さんがまだ21歳のころ、シドニーを訪れた時に仮住まいをさせてもらった家が、ビーチ沿いの斜面に建つ木の家だったといえます。

そこには薪ストーブがあつて、犬がいて、ご主人は建築家、奥さんは照明士——そんな環境に身を置いているうちに、「自然に溶け込んだ家の心地良さ」が体に染み込んでいました。

新築してから2年連続で大きな台風に見舞われ、ダメージを受けたことも。庭木が塩害にあつたことも。そして愛犬キャリーとの別れも。8年が経ち、この家は何物にも代え難い「居場所」となりました。

